
Devilish Story

阿僧祇 那由他

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devilish Story

【Nコード】

N7364C

【作者名】

阿僧祇 那由他

【あらすじ】

悪魔を狩る仕事を請け負う少女、メルア。二挺の銃を手にした可憐な少女の正体とは……。

Case・i【GandB】(前書き)

この作品が初めての投稿となります。那由他と申します、どうぞよろしく。

連載作品なのでまだまだ続きます！

ですが全4話あたりを目標と、短編連載をしたいと思います。

Case・1【Ganda】

完全な勝利ではなく、完全な支配。

昔からお父様に言いつけられてきた言葉。そして我がシユヴァルツ家の家訓である。

だがその家訓に私は何年も悩まされ続けてきた。

完全な支配とは何か？

お父様に問うても「自分で探せ」の一点張りで教えてくれる気は皆無らしい。

「その答えが知りたければ自分で確かめろ、まあ今のお前には答えを見出すのは無理だと思うが」

その言葉に反発するように家を出て、その答えとやらを探す事にした。

私の性格を熟知したお父様が言うのと分かっていたのに反発してしまった、いやさせられたのだろう。

だけども後悔はしていない。

お父様が意図的に私を家から出したのも単なるきっかけに過ぎず、大半は私の意思なのだから。

私は特注で作らせた武器を1つと側近を1人連れ、生まれて初め

て外の世界に足を運んだ。

この小さな世界を視て聴いて感じて『何か』のきっかけになればいいと思っている。

初めて見る外の世界はどれも新鮮で私の好奇心を^{くすぐ}るものだった。

1952年、当時イギリス国王であったジョージ王が死去、王女エリザベスが女王に即位した。

「今の話題は女王陛下の話で持ちきりね」

地面に落ちていた新聞紙を拾い上げ三面記事のタイトルを見る。どこの新聞もどれも同じようなタイトルである。

つまらない、もっと刺激的なことはないのだろうか。国民にとっては充分刺激的なことだろうと思うけど、私はもう同じような事を何度も見てきた。

私にとって国の王が代わることはそう珍しい事ではない。旧友が死んでしまうというのは少し寂しいという感情もあるにはあるがどうも私にはそういった感情が薄いらしい。

「そろそろこの国ともお別れしようかしら？ アシユタロス、次は……ニッポンがいいわね、サムライとかブシドーとか、それにサム

ライというのは主君に忠実なんでしょう?」

「お言葉ですがメルア様、日本国にはもう侍というのはいません。現在は敗戦から何とか復興し、平和な国であると聞いたことがあります」

平和な国……か、でもサムライを部下にしたいのは絶対。

「仕方ない、頼まれてた最後の仕事を終えてからこの国とお別れしましょう。で、裏付けはとれた?」

「残念ながら……ですが一連の殺人事件は人間の手によるものではないのは確かです」

「でしょうね、あんな挽肉にされた死体が人間の手によるものだったら今頃私たちは絶滅してるわよ」

1ヶ月ほど前、ある殺人事件が発生。殺されたのは推定女性。次に2週間前、殺されたのは推定女性が5人。最後の殺人が行われたのが一週間前、殺されたのは推定女性が10人。

被害者全員の性別が推定なのは死体が挽肉状態でさらに、全員の死体の内臓の一部がなくなっていたためである。現在身元確認中とのこと。

新聞の三面記事は女王陛下にとられてしまっているけど街では犯人を『屠殺屋』と呼び以前活気があった街は日中でも夜のように静かだ。

市民の噂では「女王陛下が殺した」とまで過剰な話まで流れ始め

彼女にとっては迷惑な話だと思う。

つい先日、その女王陛下から仕事の以来があった。

街で話題の屠殺屋を捕縛かそれが無理だった場合の殺害、というもの。私はその屠殺屋が『悪魔』であつたら引き受けると返事を返した。

「さつさとこの仕事を片付けてニッポンに行きましょう、スシという伝統的な食べ物も食べてみたいしサムライも1人くらい部下にしたいし」

「メルア様、私の話を聞いていましたか？」

「聞いてたわよ、サムライはいなくても日本人はブシドーを持った人が少なからずいるでしょ、私の命令に忠実な部下がもう四人くらい必要なのよ」

そうなのだ、私が請け負っている仕事は私と側近（世間的には秘書）アシュタロスと二人だけで行っている。情報収集はアシュタロスに任せているけど、人手が少し欲しいとぼやいていた事があつた。

「忠実な人間でしたらこの国にはたくさんいるのでは？わざわざ日本まで行って探さずとも……」

「この国の人間は国王という称号、ブランドに忠を尽くしているだけよ。個人ではないわ。ニッポンのブシドーは人、つまり個人に対して忠実なの。いい？ 私が行くと言ったのだから行くの」

困り顔をしながらアシュタロスは「はいはい」と返事をする。自

分なりの意見はあるが、私の言うことにはしっかりと従う良い側近だ。

「まずはどうしましょう？ この国中を二人で探し回るわけには行きませんし」

確かに。屠殺屋の犯行現場はかなり疎らになっている、アシユタロスが犯行現場を記した地図を見せる。その地図をみて私はあることに気づく。いや、地図を見れば誰でも気づくことだ。

犯行現場は私たちが現在居るロンドン市内に集中していた。

(この事件、何かの事件に似ているような気がする)

少し自分の頭の仲の中の記憶を探るがなかなか出てこない。年をとり過ぎるのも厄介なものだと思う、膨大な記憶の中から小さな記憶一つを探すのは大変だ。

「ロンドン市内に集中しているわね、とりあえずアシユタロスは街での情報収集。私は記憶を探してくるわ」

「わかりました。では夕方に一旦ホテルで合流しましょう」

淡々と告げると彼女は市内の中に消えていった。

「さて、この国の記憶を探すとして……一般的なのは図書館ね」

と、言うことでまずは図書館に向かうことにした。

このあたりで結構な情報源がありそうな処は……ロンドン大学あたりが良いところかしら。私はロンドンの街並みを楽しみながら口

ンドン大学の図書館に向かった。

(一体何の事件だったかしら、かなり昔の事件だった気がする)

図書館に着いた私は管理人に許可をもらい、倉庫に眠っている大量の新聞記事を読み漁っている。

何時だったかしら…… ロンドン市内の連続殺人事件があったはず、まずはそれをくまなく探すしかないよね。

もう昔の殺人事件なんて覚えてるわけない、小さな事をいちいち覚えていたら脳がパンクしてしまう。新聞を1枚1枚細部まで確認し、読み終えたものはその辺に置いていく。

どれくらいの時間新聞を読み漁っていたかはもう分からないが日は落ちていくようだ、あたりはすっかり暗くなっていて、何時点灯したのか天井の電球とテーブルの蝋燭が火が灯されていた。

かなり集中して読んでいたらしい、読んだ新聞の山は20年分位はありそうだ。っと、早くホテルに戻らないとアシュタロスにまた何か言われそうだ。

新聞をそのままにして帰ろうとすると、管理人が片付けると言ってきたので渋々片付ける。ちゃんと年号順に並べ替えた頃には完全な夜になっていた。

(絶対どやされるわね)

季節が秋に入ったばかりの夜はまだそう寒くはないが、真夏のよくな暑さはもうなくなっていた。

白い息が出るわけじゃないけど、もう薄着はできないような気温。肌が汗でベトベトする夏よりは幾分もマシだと思う。

いまいち明かりの足りない街灯の下を歩きながら、私はふとした異変に気づく。数分前から一定のリズムでの足音で私の後ろを歩く輩がいる。

そいつは私が歩幅を緩めると、同じく歩幅を緩め、早歩きになると、そいつは同じく早歩きする。もしかして、何もせずにもう当たりを引いた？

とりあえず、待ち合わせのホテルまでは結構近い距離だったので、少し様子を見る事にする。後を見ずに、足後だけに耳を澄まして集中する。どうやら確実に私を狙っているらしい、本当に当たりのようだ。

私は最後の確認として、わざと人気のない路地に入っていく。すると、ずっと私を追いかけていた足跡がピタリと止まり気配もなくなった。つけてくるようだったらただのチンピラだったけど、私がわざと人気のない路地に入ったのを見破ったとなるとやはり当たりのようだ。

しかし、屠殺屋がチンピラみたいな奴だったら、危なかったかも。武器はホテルにあるし、対人間用に拳銃は持っているけど屠殺屋が本物の悪魔なら、意味がないだろうし。

もう私をつけてくる気配がないので、急いで待ち合わせのホテルに向かった。確実にアシユタロスに何か言われそうだ。

「シユヴァルツ家の御息女とあるうお方が、時間を守れないとはどういふ事ですか」

やはり、アシユタロスは私が遅刻してきたことに文句をつけてきた。

「言い訳のように聞こえるかもしれないけど、調べ物に夢中で時間を忘れていたの」

誰が聞いても言い訳に思えてしまう、しかし本当の事なのだから仕方ない。

「それで、夢中になっていた調べ物で何か成果がありましたか？」

ありましたか？ と聞かれても「ない」と答えるとまた文句をつけられるだろう。

「貴女の方は何か成果があったんでしょうね」

私に文句を言うくらいならそれなりの成果があったって解釈していいんでしょうね。

「はい、まずは被害者達全員の性別が女性であることが分かりました。挽肉状の死体でも内臓は一部を除いて無傷の状態、その中から全ての死体に子宮があったそうです」

なるほど、内臓が無事で子宮があれば確率的に女性、ということになる。

「で、一部を除いてってどういふこと」

「全ての死体の中に心臓だけが紛失していました。犯行は全て常に公共の場もしくはそれに近い場所で行われています」

やはりこの事件、記憶の中に覚えがある。何かの事件に良く似ている事件だ。あと少し、あと少し確信的な情報があれば思い出せるかもしれない。

「……それと被害者の内1人だけ身元が判明しました」

「挽肉状態なのに良く分かったわね」

「名前はメアリー・ウィルソン、25歳女性。彼女の死体は首だけが無事でした。体の方は他の被害者と同じく内臓を残して挽肉状態です。殺害された現場近くに住んでいて職業は……」

「 売春婦」

思い出した、完璧に。この事件は一昔前にあった事件と似ている。

「よく分かりましたね、どうして……?」

「1888年の8月31日〜11月9日の二ヶ月間にロンドンで少なくとも5人の売春婦をバラバラ殺人した連続猟奇殺人犯といえば、分かるんじゃない?」

そう、かなりの年月が経った現在でも迷宮入りしている有名な事件である。署名入りの犯行予告文書を新聞社に送りつけ、劇場型犯罪の元祖であると言われた事件。

被害者は全員、鋭利なメスのような刃物で首を描き切られ、その後特定の臓器を摘出していたことから医学や解剖学の知識があるとされ犯人は医師だったり、果ては王族関係者だったり、犯人特定はできていない。

故に市民達の間で呼ばれていたあだ名は……言わずと知れた名前。

「切り裂きジャック、ですね」

「ええ、ほぼ、正解よ。死体がバラバラじゃないけど限りなく近い存在ね、たぶん模倣犯と愉快犯の一種だと思うわ。それから近い日にどこかの新聞社に手紙が届くはずよ」

切り裂きジャックの模倣犯であるならば新聞社に犯行予告の文書を送り付けるに違いない。

「はい、仰る通り新聞社に犯行予告ともとれる文書が送り付けられています。内容は「私は決して捕まらない、これからも犯行は続くと書いてあったそうです」

だいぶ舐めてくれるじゃない、こうなったら、犯行が起こる前に捕まえてやるわ。

「しかし、模倣犯というのであればもしかしたら人間の可能性があるわけではありませんか？ 悪魔が過去の事件を模倣するという手の込んだこととは思えません」

確かに……今までたくさんの悪魔を狩ってきたけど、模倣する悪魔なんていなかった。やはりこの事件は人間の手によるものだろうか。

「この際どつちでもいいわ、悪魔だったら殺して報酬を貰う、もし人間だって確信をもったら調査した事を報告してそこまでの報酬を貰ってお終い、事件には何も関与しない。これでいいでしょ報酬はそんなに悪くない値段なんだから」

「分かりました、明日から引き続き調査をします」

「そうね、なるべく早く確かな情報を頂戴、特に屠殺屋の出現場所とかを……ね」

多分犯行予告が新聞社に送りつけられたということは、犯行は激化すると見てもいい。最近の被害者の数は十人とすると次はその倍はくだらなくなるだろう。

「私も調査をしたいけど、逢っておきたい人がいるから無理かもしれないわ」

「了解しました、では今日はもう休みましょう」

「ええ、シャワーを浴びて寝るわ」

今日は一日中小さな文字と睨めっこしてかなり目が疲れたし、明日に備えて十分な睡眠が必要だ。私は部屋にある備え付けのシャワールームに入り、1日の疲れを暖かいお湯で流し取る。

「その答えが知りたければ自分で確かめろ、まあ今のお前には答えを見出すのは無理だと思うがな」

ふと、昔の記憶が頭を過ぎる。お父様の言葉は未だにはつきり記憶に刻まれている。

あの言葉をきっかけに私は外の世界に足を踏み入れた。

初めて目にした外の世界はとても広く感じ、私は高大な景色、世界の文化に触れ、たくさんの人に逢い、私はこの広い世界に感動した。

明日は『彼女』に逢おう。

久しぶりに少し話がしておきたいし、いろいろ聞いてみたいことがある。

しばらく流れるお湯を体に当てながら私は立ち尽くす。

今回の事件、これは本当に悪魔が引き起こした事件なのか……

まずは明日、彼女に訊ねてみよう。

G a n d B e n d . . .

Case 1.5【Recollection】

シャワーを終えてベッドの上に用意してあったネグリジエに着替える。

アシユタロスが用意してしてくれたものだろう、絹のようなやわらかい材質でフリルやレースが目立っている。色は黒色、やや半透明。なるほど、私の好みを見事に抑えている。

部屋を見渡してもアシユタロスの姿はない、彼女とは長い付き合いだが私は一度も彼女の寝姿を見たことがない、毎日夜になると彼女はどこかへ行ってしまふ。

何時もの事だと考えながら、鞆の中から愛銃を取り出す。普通の自動式拳銃のフォルムとは一線を越えた特殊なフォルムを持つこの銃の名はモーゼル・ミリタリー。私が愛用し続けて約50年が経とうとしていく。

明日はこれを携帯して行こう、正確な射撃にはストックが必要だけど明日は撃つ必要も場面もないだろう。

マガジン内を除くと空になっていたので、弾薬を込める。モーゼル・ミリタリーへの装弾方法は特殊で、空になっているマガジンに10発まとめられたクリップを排莖口に差込み、指でマガジンに押し込む。その後クリップを抜くとボルトが前進してチェンバーに第一弾が送り込まれるようになっていく。したがってクリップなしでの装弾は事実上できないわけである。

さらに、マガジン内が空でないとリロードできないので10発う

ち尽くす必要があるのだ。どうしてこんな銃を持っているかという
と……デザインが気に入ったからだけなんだけど。

そのリロード時の不便さを補うためにもう一挺、私は銃を所持し
ている。銃の名はルガーP08アーティラリー。

ルガーP08にストックとスネイルマガジンを装備させた精密射
撃と短機関銃並の装弾数を誇るまさに戦闘に特化したハンドガンだ。

モーゼルは携帯性、ルガーは戦闘性を優先させている。普段はモ
ーゼルを持ち歩くが、ルガーは殆ど使用しない。

装弾を終えハンマーを静かに戻す。こうすることで暴発を防ぐこ
とができる。

そしてモーゼルを寝ていても自分の手の届くところに置いて、私
はベッドの中に潜り込み、十分な睡眠をとることにした。

明日は昔からの友人に会いに行く。素直な喜びと少しの不安を胸
に抱き、私は眠りについた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7364c/>

Devilish Story

2010年10月9日05時31分発行